



生 静 岳 11 月  
薦 坂 推 宮

をのこ一人育てし宿へ八月来  
空中に暮らす東京稲光  
鬣のあるか向日葵靡くとき  
赤富士を曳きゆく雲の力かな  
夏深し風聞の死を確かめず  
煩惱の数だけ灯し夏の暮  
月代や牛に枯れるといふことも  
電車来るとき声上ぐる稲穂かな  
働きて保つ体やちちろ虫  
鬼灯の根元は黄泉にあるらしき  
蕎麦一枚打ちて始まる盆休み  
英の蘭け銀漢の尾をつかむ  
帯結び習ふや木槿咲きみちぬ  
八月や音無く煤の積もりたる  
露零一人になりてみゆるもの

\*

国見敏子  
堤保徳  
矢島惠  
川村五子  
山崎妙子  
丸山貴史  
柳澤和子  
高垣純子  
塩原英子  
松見智子  
中山賢助  
根橋久子  
ビュニャールしづ子  
小原真理子  
杉木妙子

晩夏光まるく繋がる空と海  
夕かなかな月日積みゐる籌木かな  
よちよちと雷鳥よろよると私  
激情をもて余したり緋のカナナ  
今生の今に火が点きつくつくし  
足鱈に海の硬さやダイビング  
歯科医出て木にも歯のある葉の茂り  
ごろごろとお化け胡瓜が月の畑  
オランダの旅の名残や亜麻の花  
白墨のかつかつ響く休暇明  
兄の忌や柱にとまる秋茜  
夜濯の音の聞こゆる原爆図  
新涼や老いを嘆かず楽しもう  
焼肉の食べ放題や原爆忌  
蜉蝣や電車の中の深き森

池間キヨ子  
山田一政  
佐藤さく  
高橋洋子  
渡辺秀雄  
田中優子  
円城寺龍  
小林春代  
早川英夫  
松本京子  
池本千枝美  
柏田浪雅  
斎藤剣岩  
青柳義之  
長島環

# 岳俳句・拓くことば 十一月<sup>(447)</sup>

宮坂 静生

つづけることが生き甲斐となり生涯の誇りとなる。

空中に暮らす東京―土とはなにか、水とはなにか

をのこ一人育てし 瘡へ八月来 国見 敏子

「瘡へ」は胸元にものがつかえて苦しいこと（大漢和辞典）とある。母親にとり男の子との関わりは同性の女の子よりも微妙に深い。頼りになる。頼りにならないときには心配の種となる。作者の家族事情を知らないので、掲句に関し、一般的なことをいうにすぎないが、なぜ上の語句に「八月来」が関わるのか。一月遅れの盆を想像した。八月は一年でもっとも血脈を思う重い月。現代人であっても、ふと先祖とか家族のことなど、この世のしがらみを思うことが多い。豪快のようでないが人一倍感性鋭い作者らしい自省の作と読んだ。

空中に暮らす 東京 稲光 堤 保徳

わずかばかりの庭があり、町には立派な公園があっても、東京人は「空中に暮ら」しているといえる。土から育てたものを水で煮炊きして食べる田舎暮らしとは本質的にことなる。すべてが加工されたもの、宇宙での空中食と同じものを食べて暮しているようなものだ。便利であり、効率がよい。食生

くなる。仕方ないと、かつて付き合いのあったくらいの人々の死はそのまゝ。しかし、「風聞の死」とは案外、気になっていた人であったかも知れない。死に対して、図太くなる。齢をとるとはそういうことか。

煩悩の数だけ灯し夏の暮 丸山 貴史

街の家並に点る灯を見下ろす。一つ一つの灯が「煩悩」のあり処を示している。いわれてみるとその通り。おびただしい煩悩の巷。その中で暮しているところが娑婆（俗世界）。「秋の暮」よりも「夏の暮」の方がとりすまさない生々しさが息づいている感じ。修羅の巷とはまさにこれ。

## 今月の秀句

八月や音無く煤の積もりたる 小原真理子

巧みな句に感心した。いうならば歳月（時間）という歴史の「煤」。どんな事象もマンネリとなり新鮮さを失う。感動から遠ざかる。表面に煤が取り付き積もる。広島忌・長崎忌・敗戦と、みな煤まみれになりながら、煤払いに一生懸命の人たちによって守られているようなもの。日々新たにとは口でいうほどやさしいことではない。暮しの煤払いは十二月、歴史の時間の煤払いは八月。気を許せば「音無く煤」が溜る。

活に時間をかけないで、余暇はお芝居を観たり空中での愉しみにまわすことになる。東京人の基本は空中思考（知的であり、土俗のしがらみから離れて想像を楽しんでいる）。大東京に昔ながらの稲光だけは、真夜中にぴかりぴかりと無気味に走る。現代の都会暮し〈東京〉の本質を突いている。

蠶のあるか向日葵 藤摩くとき 矢島 恵

向日葵をライオンにでも見立てた作。花の中のライオンはなにか。それは向日葵。蠶といえばライオン貌の花のまわりにそんなびらびらも付いている。詩的な連想が写生的なのがこの作者のすぐれたところ。おしゃべりが饒舌にならない。

赤富士を曳きゆく雲の力かな 川村 五子

夏の夜明けの赤富士がしだいに変わりゆくさまを捉えている。大きな富士山を雲が出て曳いてゆくと見た。〈赤富士に露滂沱たる四辺かな 富安風生〉の赤富士の時刻は短い。甲斐側からの夏の富士、裏富士の雲に押される姿を描く。

夏深し 風聞の死を確かめず 山崎 妙子

齢をとるとだれかが亡くなったとの「風聞」（風のたより）が多くなる。あゝそうと聞き流す。確かめることはしな

月代や牛に枯れるといふことも 柳澤 和子

堂々たる句でありながらしみじみと深い。名句。月の出の空の明るさ。いまだ牛の姿がわかる牧場か飼育場。牛の悠然たる姿に「枯れる」落ち着きとしずかさを感じとった作者の眼力のたしかさに感心した。

電車来るとき声上ぐる稲穂かな 高垣 純子

わかり易く明るい句。電車が通るたびに稲穂が揺れる。それをあたかもよろこびの声を上げていると感じたもの。たしかに、こんな風に詠んでみたい思いが十分伝わる。比喻でなしに直叙法で「声上ぐる」といい切ったのがよい。

働きて保つ体やちちる虫 塩原 英子

〈働く〉のは大切。なによりも健康によい。精神も含めて働く満足感が体が元気でいられる。こおろぎが鳴く稔りの秋は忙しいだけに働ける満足感もまた格別だ。やさしさがよい。

鬼灯の根元は黄泉にあるらしき 松見 智子

鬼灯と書くほおずき。盆に鬼灯を糸でからめて提灯のように仏前に吊るす。どういいういわれか、黄泉からやって来る私たちの灯りの代りであろう。その根元が黄泉に通じているとの着想に感心した。上掲の土俗の風習などからの発想であろうが、あの世とこの世とを自在に行き来する重層的な思いがあって出来た一句と思う。着実に思いが深まっている作者だ。

拓くことば ② 自句寸言(6)「冬休み」

信濃真秀ろば馬総身の晩夏光 昭和33年

「龍膽」(第九十三号・昭和三十四年七月号) 雑詠。表記「まほろば」。主宰は「夏雲やずしりと母の握り飯」の高原詠を推奨された。掲句も美ヶ原詠。「倭は国のまほろば」(『古事記』の浪漫に憧れ、「まほろば」を句に使いたくて用いた。阿部宵人(好日)が飯田龍太と昭和三十三年八月に来松。松本での俳句大会で特選に選ばれ、三省堂刊行のコンサイス国語辞書を賞品に貰った。長く愛用した。句は自己満足の作で、円熟は頽廃ではないかと未熟者が勝手なことを思っていた。句集『青胡桃』所収。

大学に肥汲みの牛冬休み 昭和34年

『昭和句集』(明治書院・昭和三十四年十月刊) 所収。俳句講座(明治書院刊)の別冊。富安風生選に入り、素晴らしい評を貰った。長いが暗記しているので引用したい。「残酷極まる」といいたくらい非情に徹した句である。一切の何ものとも妥協することを肯んぜず、気味悪い眼を据えている作者を眼の前に見るような気がする。

最高学府も汲取人夫も、作者の眼には、ただ無差別な現象としてのみ存するのであろう。しかも、再読三読している間に、一句の奥の奥の方で瞬いている作者の大愛の眼?といったものを感じて来るような気がして来るのである。文中の「大愛の眼」には感銘した。どうしてもそんな眼を持つことができるか。生涯の課題を与えられたような感動であった。

旧制松高の後身、信州大学文理学部の中休みの実景。肥車を引く牛が櫻の枯木に緩く繋かれ、桶に汲取る肥がよく臭った。パンカラ学生は「田舎の香水」と称し、この臭いを愛した。句集『青胡桃』所収。

筋金は働くちからラグビー猛る 昭和36年

「龍膽」(第九十四号・昭和三十六年七月号) 雑詠。初任地北佐久農業高校昼間定時制御代田分校に一年勤務した。勤劳学生詠。体育授業か、真っ白な浅間山に向かってラグビーのタックルが今も目に見える。頭はいいが家が貧しい生徒が多かった。体育と数学以外は教えた。「己が手を鋸でぬくめて冬木挽く」も同時詠。教師も生徒もがむしやりに働いた。稲刈りも覚え、ガートラの運転免許も取った。夢中だった。句集『青胡桃』所収。

蕎麦一枚打ちて始まる盆休み 中山 賢助

盆休みを日常の一こまとして淡々と捉えたのがよい。仙台のまとも役として精一杯努力している。句も着実に実を描くのが上手になっている。地味であるが、やさしい心遣いを一句からうかがうことができる。

英の蘭け銀漢の尾をつかむ 根橋 久子

「英」は萼とも花の総状を指すとも。天上の天の川にいとむくらいだというから高原の草丈の高い秋の花を連想する。さしずめ丸葉岳路の黄色の頭花などを。美ヶ原山頂あたりの嘯目吟か。いく分オーバーな表現に心の弾みが伝わる。

帯結び習ふや木槿咲きみちぬ ビュニャル

ルクセンブルク在住のしづ子さんが和服を着る機会がふえたものか。着付教室に通っているのではないが、「帯結び習ふ」がほほえましい。木槿との取り合わせも日常の一こま。さりげなさが心遣いのゆかしさとして伝わる。

露零一人になりてみゆるもの 杉木 妙子

「露零」が巧み。そこに映し出されるささやかさに万感が籠もる。生きるとは二人でもあり、また一人でもある。二人のときに見えたものの、一人にならないと見えないもの。どちらも真実であるうが、後者の方が深い。ぎりぎりの生。さびしさの極みが見える。

同人集から次の句を推薦候補に控えた。

|                |       |
|----------------|-------|
| 一木となり雨に立つ草の花   | 田中 純子 |
| 檸檬一顆不戦の思ひ新たにす  | 久保美智子 |
| 水底にべしやんこの鏡広島忌  | 満田 光生 |
| 子捕るてふ隠り沼へまでお花取 | 木幡 テイ |
| 盆の家まるで方舟犬猫馬    | 小熊 里利 |

籌木とはなにかートイレットペーパー代りの木片

夕かなかな月日積みある籌木かな 山田 一政

歴史探訪俳句をもっぱらの作者。ついに、昔、用便の折、尻をぬぐう木片ーこれを籌木というーにまで至りました! 私も先年秋田城の発掘現場でこれが籌木だという木片を見せ貰った。もう臭くはない。よくぞ出てきたと感嘆した。秋田城址には渤海使がもたらした寄生虫の卵だとか蝦夷人の煮炊きの甕だとか珍しいものがあり、目をみはった。中でも籌木はその最たるもの。巧い句だ。歴史が蘇った感じ。

よちよちと雷鳥よるよると私 佐藤 きく

ワンダーフォーゲルが高じて山登りへ。上高地の雨天をついて、岳沢から穂高岳へ、そして涸沢へ下りたという。その体験詠。作句も山登りもその意気や壮。しかも京女。世の中は固定観念でみることはできない。恥ずかしいように詠いながらなかなかの押し。これではなくてはいけない。お手本。

激情をもて余したり緋のカンナ 高橋 洋子  
これ又、激しい一句。「緋のカンナ」を上廻るわが「激情」とは。だれか助けてやってください。チマチマしないのがよい。体当り俳句大歓迎。

今生の今に火が点きつくつくし 渡辺 秀雄

折笠美秋がまとめた、早大俳句研究会第四句集『星座図』（昭和三十年）を手に入れた。作者は当時大学三年。その句〈秋の灯の曼陀羅となり日は沈む〉を最近わが執筆の〈おはよう名句〉に紹介した。あれから六十余年。「今生の今に火が点き」とはすばらしいと思う。蝸の声も又必死。共感する。

足鰭に海の硬さやダイビング 田中 優子

「海の硬さ」に体験者でないといえない実感がある。「足鰭」も具体的で、スポーティーな肢体が見えるようだ。

歯科医出て木にも歯のある葉の茂り 円城寺 龍

〈へはは〉と〈へは〉でまとめた力詠。この野郎〈歯め〉と入歯の具合がわるかったのか、歯への八当りを記念の一句にしたベテランの芸。木の肌が歯をむき出したようにみえた。老木とはいえ、葉はうっそうと茂っている。〈へはは〉と自足の作。

ごろごろとお化け胡瓜が月の畑 小林 春代

お化け南瓜やお化け西瓜でもなく胡瓜。見落したもののか。

ら日常の暮しを暗示する夜濯の音が聞こえてきたという。意外性がきわめて生活感溢れた連想なのがよい。原爆図という大胆なショッキングな取り合わせが多いが、卑近な日常から句材を見出し、そこに感動を呼ぶには多くの試行錯誤の体験がある。掲出はその果の一句か。やさしい。

新涼や老いを嘆かず楽しもう 斎藤 剣岩

「むのたけじの死」とある。秋田在住の反骨の新聞記者むのたけじの死を悼んだ句に、たけじの哲学を取り入れ一句にした。老いこそ楽しむもの。高齢社会に入り、この精神がいい。私がいまこの選評を書いているのは長崎県五島市福江の

## 今月の秀句

晩夏光まるく繋がる空と海 池間キヨ子

宮古島の作者と知って、一句の光景がよりあざやかに目に浮んだ。先年、島を訪問し、東平安崎に立ったとき、太平洋と東シナ海の境の潮目を前に感無量であった。空と海が「まるく繋がる」のであった。球の中に空と海が入った感じ。大きく日の光が包む。晩夏光がいい。お日さまが爛熟している。力を出しきり、光も勁い。こんな光景をみると、どんな気持になるであろうか。ことを失う感動であろう。

種がぎっしり、赤茶けたお化け胡瓜。月光が射し、いよいよろくろっ首のごとし。しかもこのうとと転がっている。これぞお化け。お化けに関心を持ち、又作者の句幅が広がる。

オランダの旅の名残や亜麻の花 早川 英夫

亜麻の花が懐かしい。私には戦時中を連想させる。種子を搾って亜麻仁油をとった。茎からの繊維はリンネルや寒冷紗に用いる。重宝した花で、どの空地にも見られた。オランダでは印象深いであろう。亜麻の花を介し、戦時と現代とが繋がるのが私には貴重であった。札幌市在住の作者。

白墨のかつかつ響く休暇明 松本 京子

久しぶりの授業。先生が白墨で板書する。その快活な音が静かな教室にひびく。さあ二学期といった感じ。白墨を使う先生は少なくなった。が、私は白墨好き。チョーク箱は教師時代の宝物。いまでも鉛筆削り屑入れに使っている。古いね。

兄の忌や柱にとまる秋茜 池本千枝美

秋茜とんぼが兄の化身とみた。私も同様な体験がある。一日中玄関先の柱に鬼やんまが止まって動かない。盆であった。自然界には目に見えないが、転生があるのではないか。

夜濯の音の間こゆる原爆図 柏田 浪雅

佳句。残酷この上ない原爆図を凝視していると、そのなか

宿。ねんりんピックの特別選者として昨日から来ている。俳句こそ老いを嘆かず楽しもう運動をすすめるため。いい句に出会った。早速、全国大会でこの一句を紹介しよう。

焼肉の食べ放題や原爆忌 青柳 義之

これはまたすさまじい句だ。焼肉食べ放題の看板を見かける。それを八月の原爆忌と取り合わせるとは。残酷といおうか悲惨といおうか。大胆な一句には違いない。人肉などではないから心配無用であるが、世が変わればこんな「平和」なちぐはぐなイメージも許容せざるを得ない。

蛭蛸や電車の中の深き森 長島 環

とんぼが入り込んだ午後のけだるい電車車中とみる。みんな目をつぶって仮眠中。「深き森」だ。特急であろうか。イメージゆたか。なかなかの力作。とんぼといわないではかない蛭蛸を配したところにも現代のシャープな感性がある。

岳集推薦候補作を次に掲げておきたい。

桔梗咲き何か覚悟のやうなもの 樋上 照男

青海をうねる秋刀魚の遊びかな 吉澤 清

交差点光の帯を夜の蟬 富山 珠恵

海女小屋へ細き道あり野菊咲き 小森 丈仙

桃の尻己が重さに紊れをり 梶原 夢乃

秋日和よちよち歩き板に付く 土屋 忠史

女郎花木曽路に狐嫁入りす 中村 和子